ことばが芽吹く瞬間をとらえる

書評家／法政大学大学院兼任講師　倉本さおり（くらもと）

Essay 時の調べ

ふせんの花が咲いているよ。

当時わたしが持っていた本のページから色とりどりのフィルム付箋がはみだしている様子を眺めながら友人が口にしたことだ。期せずして美しいことばで言い表してもらえてとても嬉しいけれど、わたしとしては花ではなく、あちこちで芽がでているような感覚に近い。

わたしの生業は書評家だ。まずは読まないと始まらない。ページの角を折る人。読みながら余白に書き込みをする人。書評家によってさまざまに流儀があるが、こちとら断然付箋派で、なんとなく気になった箇所があればとりあえず付箋を貼っていく。それは自分にとって「種をまく」という行為に相当する。

読み終えたら芽がでている部分を確認し、場合によっては「芽」だけすべて書き出してみる。思考の水に浸したとき、行間を埋めるようにことばが勝手に生い茂ってきたらしめたものだ。そうはならなかったときはいったん諦めて時間にさらす。そのうちに、とりわけ芯の強い芽が飛びだして伸びてくる。その株を注意ぶかく取り出して懐に抱えて何日も過ごし、やがて一本の木と呼べる姿になるまで育てあげる。

われながら呆れるほど非効率な仕事のやり方だとは思う。生成ＡＩがメールや資料を一瞬で作成してくれる世の中にあって「そのうち書評家の仕事も取って代わられるんじゃない？」と言われることもしょっちゅうだ。もちろんそんな日がいつか来ることも覚悟している。実際、東京新聞でチャットＧＰＴに芥川賞の受賞作を予想させるという企画なんかもあったりして（結果は九段理江の『東京都同情塔』で見事的中）、日々なんとなく肩身が狭い。

それでも、と思う。ことばを芽吹かせるために必要なものとは、今のＡＩにとってタスクの埒外（らちがい）なんじゃないだろうか。

金原ひとみ『蛇にピアス』。いまからおよそ二十年前、人体改造に耽（ふけ）る若者たちという、当時にしてみればスキャンダラスな内容に加え、綿矢りさと共に史上最年少で芥川賞を受賞した際のマスコミの熱狂ぶりを覚えている人も多いだろう。次に引用するのは終盤の部分、行方不明だった恋人のアマが無惨に嬲（なぶ）られた死体となって警察に発見された後、しばらく経ってから紡ぎ出される〈私〉のモノローグだ。

①大丈夫、アマを殺したのはシバさんじゃない。アマを犯したのはシバさんじゃない。シバさんは、犯人じゃない。シバさんは、きっと大丈夫。

②大丈夫。アマを殺したのがシバさんであっても、アマを犯したのがシバさんであっても、大丈夫。

①は初出時のもの、②は単行本化に際して改稿されたものだ。叙述の内容が順接で紐づけられ、論理的ないし倫理的な齟齬（そご）を含まない①に対し、②のまきちらす強烈な違和感はどうだろう？――②でいう「大丈夫」とは、敢えて不穏を抱き込んでみせたうえでの肯定だ。何が／誰が「大丈夫」なのか、その帰属先を曖昧にさせたまま不遜（ふそん）にも文章を閉じている。端的にいえば、改訂後の②からはより不道徳で理解しがたい、〈私〉の危うい姿がたちのぼってくる。

①も②も同じことばで始まり、同じことばで綴じられている。にもかかわらず、与える印象がまったく異なってくる。文芸の妙が鮮やかに姿をあらわす瞬間だろう。

もちろん両方のテキストをデータ化し、「大丈夫」という語を検索して比較すればすぐに見つけられることではある。けれど、そもそも読んだときにひっかかりを感じなければ、それらの語句を種としてとらえられない。埋め込まれた感覚がいっせいに芽吹く瞬間にたちあうことはできない。

だから今日もわたしは種をまく。ことばの息吹を信頼しながら。

略歴
１９７９年東京生まれ。書評家。法政大学大学院兼任講師。週刊新潮「ベストセラー街道をゆく！」、小説トリッパー「カルチャー放談」を連載しているほか、文芸誌、週刊誌、新聞各紙で書評やコラムを中心に執筆。ＴＢＳ「文化系トークラジオＬｉｆｅ」サブパーソナリティ。共著に『世界の８大文学賞　受賞作から読み解く現代小説の今』（立東舎）、『韓国文学ガイドブック』（Ｐヴァイン）など